

忘却は罪？でも思い出すのは残酷？

眞鍋由比

「忘却は罪です」と言ったのは『なんて素敵にジャパネスク』（氷室冴子著 コバルト文庫）の吉野の君。帝の落胤だった少年は自分のことを忘れていた父を恨み、復讐の鬼となって罪を重ねてしまうのです。

半年延滞されていた本の督促状をカウンターに持ってきて「こんな本借りてない。そちらの間違ひではないか？人違ひではないのか？」と強い口調でおっしゃった方のご自宅の本棚から2ヵ月後、その本5冊が見つかるのでした。こちらでもチェックしてから貸出をしているので、あまり間違えないはずなんですが。けれど半年で自分の借りた本5冊をすっかり忘れられてしまうのなら教職員の延滞督促期間を短くすべきかしらと悩んでしまいます。5冊とも表紙も著者も全く覚えがないとのことでした。ほかならぬご自分が借りていかれたのに。この方だけではなく、こんな本借りてないと平気でおっしゃる方はわりといらっしゃいます。自分の貸出状態をマイページなどでチェックできる大学図書館はいいなと思います。

そういえば芥川賞作家の赤瀬川原平は「老人力」として忘却をほめたたえていましたね。年をとって物忘れをすることは、新しい知識を取り入れるために必要だ。だから忘れっぽくなることは「老人力」がついた証拠だとし、年をとればとるほどスゴイ「力」がつくんだという前向きな主張。このごろ私もめっきり老人力がついて、ミステリーの犯人が途中でわかったときいい気になるんだけど、最後まで読んで「うわ、この本読んだことある」とわかることが再々です。二回もフレッシュな初読を楽しめたと考えればいいのでしょうか。

さてカズオ・イシグロの最新作『忘れられた巨人』は村民全体、いや国民全体が頭の中に霧がかかったように忘れっぽくなっているアーサー王の時代のファンタジーです。ドラゴンも騎士も、マーリンも戦いも、因習もできます。けれど主役はシブく老人夫婦。

深く愛し合っているアクセルとベアトリスは村では何故かろうそくをつけることも許されていない老夫婦。でもどうしても名前も顔も思い出せない息子に会いたくなって旅に出ます。道中に出遭う戦士や不幸な少年、陰謀が確実に進行している僧院、国中を不幸に陥れている竜とそれを退治する老人騎士……。アーサー王物語のように英雄が出てきてスカッと問題解決するものではありません。夫婦を乗せて渡す船頭が夫婦の愛を確かめる質問をして答えが一致しなかったら一緒に島には行けずはなればなれになる話はちょっと切なかった。

以前親切にしてくれた相手でも殺されるのを見ていなくてはいけなかったり、幼いときに憧れていた人でも憎む対象になっていたり、誰より優れた戦士になったのに昔の復讐心がずっとわすれられないままだったり一筋縄ではいかない展開が、結末まで続きます。何より自分のことを思い出せない怖さが夫婦という安心の絆のシステムの中に忍び込みます。

中世の僧院を舞台にした傑作ミステリー『薔薇の名前』ほどおぞましくもリアルでもないけれど、人生はある意味では忘れることが救いになるのかもしれないと思わせられる小説でした。どんなに自分の記憶が信じられなくても品格を失わない夫婦の姿が美しく頼もしく思えました。